

病虫害発生予報 第4号(7月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所
TEL 0736(64)2300

< 予報の概要 >

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水稲	いもち病 紋枯病 縞葉枯病	並 並 やや多 ～並	野菜全般	ミカンキロアサミウマ シロイチモシヨトウ	やや少 並
	ニカメイガ ヒメトビウンカ ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ コブノメイガ	並 並 並 やや多 並 並	カンキツ	黒点病 かいよう病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアサミウマ ゴマダラカミキリ	やや多 並 並 やや多 並 並
ウリ類	疫病 べと病 うどんこ病 つる枯病	並 やや多 やや少 並	カキ	炭そ病 うどんこ病 円星落葉病、角斑落葉病 フジコナカイガラムシ	並 並 並 やや少
トマト、ナス、 ピーマン、シ シトウ	疫病 モザイク病	並 並	モモ	せん孔細菌病	並
野菜全般	アブラムシ類 ハダニ類 ミナミキイロアサミウマ	並 並 並	果樹全般	カメムシ類	やや多

気象予報

1か月予報（予報期間 6月19日～7月18日 大阪管区气象台）

< 予想される向こう1か月の天候 >

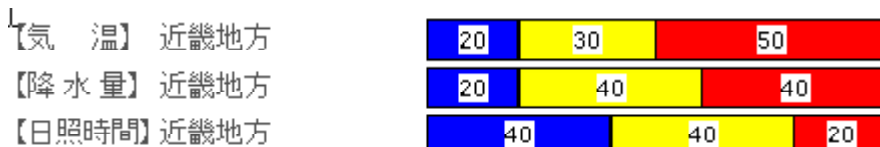
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の気温は高い確率50%、降水量は平年並または多い確率ともに40%、日照時間は平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目、2週目が高い確率60%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%） >



凡例: 低い(少ない) 平年並 高い(多い)

		月平均気温 (平年値) (°C)	月降水量 (平年値) (mm)
7月	和歌山	26.8	和歌山 143
	潮岬	25.3	潮岬 265

I. 水 稲

1. いもち病(葉いもち)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月4半旬の紀南地域(田辺市以南)における発病株率は0%(平年0.8%)と平年並であった。
- ② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 補植用苗は葉いもちの発生源となるので、早急に処分する。
- ② 常発地及びコシヒカリ、キヌヒカリ等の罹病性品種では発病しやすいので初発時期に注意し、発生が見られたら直ちに薬剤防除する。

2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月4半旬の紀南地域(田辺市以南)における発病株率は0%(平年0%)と平年並であった。
- ② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 梅雨明け後の高温期から病勢が急激に進展するので、常発地や前年の多発ほ場では幼穂形成期～穂ばらみ期の防除を徹底する。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 紀南地域 並、紀北地域 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 6月4半旬の紀南地域(田辺市以南)における発病株率は0%(平年0%)と平年並であった。
- ② ヒメトビウンカ(越冬世代)のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、和歌山市で15.3%(前年17.7%)、かつらぎ町で19.1%(前年11.3%)であった。地域の保毒虫率が10%を越えると発病株が多くなるとされている。
- ③ 前年8月の紀北地域の本田におけるイネ縞葉枯病発病株数は、25株あたり0.6株(平年0.04株)と平年に比べて多かった。
- ④ ヒメトビウンカの7月の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカの防除を行う。

4. ニカメイガ(紀北地域)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月4半旬現在、紀の川市のフェロモントラップでは誘殺されていない(平年0.7頭)。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 7月上旬の被害茎率が6.2%以下なら防除の必要はない。

5. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月4半旬の紀南地域での発生は、25株あたり0頭(平年0.3頭)と平年並であった。
- ② 予察灯による6月の誘殺数は4半旬現在、上富田町1頭(平年0.6頭)、

那智勝浦町0頭（平成0.6頭）、紀の川市4頭（平成1.9頭）と平成並である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① アドマイヤー箱粒剤等を育苗箱施用した6月田植えのほ場では、7月の防除は特に必要としない。

6. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月4半旬の紀南地域での発生は、25株あたり0.2頭（平成3.2頭）と平成に比べやや少なかった。
- ② 予察灯による6月の誘殺数は4半旬現在、上富田町2頭（平成0.3頭）、那智勝浦町16頭（平成10.6頭）、紀の川市0頭（平成11.7頭）と平成並である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカに準ずる。

7. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生時期 やや遅 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 6月4半旬の紀南地域での発生は、25株あたり46.3頭（平成10.7頭）と平成に比べやや多かった。
- ② 予察灯への初飛来は、上富田町では6月4半旬（平成5月6半旬）、那智勝浦町では6月3半旬（平成5月6半旬）、紀の川市では6月3半旬（平成6月1半旬）と平成に比べやや遅かった。
- ③ 予察灯による6月の誘殺数は4半旬現在、上富田町211頭（平成175頭）、那智勝浦町84頭（平成97.6頭）、紀の川市238頭（平成17.2頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカに準ずる。

8. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月4半旬の紀南地域では、発生を認めていない（平成0頭）。
- ② 予察灯による4月から6月4半旬までの誘殺数は、上富田町2頭（平成0頭）、那智勝浦町1頭（平成0.1頭）、紀の川市1頭（平成0.2頭）と平成並である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカに準ずる。

9. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月4半旬の紀南地域では、発生を認めていない（平成25株あたり被害葉数0葉）。
- ② 6月4半旬現在、紀の川市の蛍光灯誘殺箱への誘殺数は0頭（平成0頭）である。フェロモントラップへの誘殺数も0頭（前年0頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 幼穂形成期前後の被害は収量に影響するので、今後の予察情報に注意する。

Ⅱ．野 菜

<ウリ類>

1. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀の川市の露地栽培スイカにおける発生ほ場率は6月4半旬現在、0%（平年0%）であった。

② 日高地域の露地栽培スイカにおける発生ほ場率は6月4半旬現在、0%（前年0%）であった。

③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ほ場の排水を良くし冠水や滞水を防ぐ。

2. べと病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 紀の川市のキュウリにおける発生ほ場率は6月4半旬現在、施設栽培で80%（平年47%）、露地栽培で100%（平年64%）と平年に比べやや高かった。

② 日高地域の施設栽培キュウリにおける発生ほ場率は6月3半旬現在、58%（前年67%）であった。

③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設栽培では換気を良くし、湿度低下を図る。

② 露地栽培では排水を良くし、薬剤を予防散布する。

3. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 紀の川市のキュウリにおける発生ほ場率は6月4半旬現在、施設栽培で30%（平年39%）、露地栽培で14%（平年54%）とやや低かった。

② 日高地域の施設栽培キュウリにおける発生ほ場率は6月3半旬現在、58%（前年67%）であった。

③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、他系統の薬剤とのローテーション散布を行う。

4. つる枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀の川市の露地栽培スイカにおける発生ほ場率は6月4半旬現在、0%（平年0%）と平年並であった。

② 日高地域の露地栽培スイカにおける発生ほ場率は6月4半旬現在、0%（過去5年間の平均0%）であった。

③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 降雨にともない株元から茎葉に病勢が進展するので、梅雨期の防除に重点を置く。

<トマト、ナス、ピーマン、シシトウ>

1. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀の川市の露地栽培ナスおよび露地栽培シシトウにおける発生ほ場率は6月4半旬現在、ともに0%（過去8年間の平均：ナス0%、シシトウ0%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 梅雨末期の多雨で急激に病勢が進展するため、降雨後は早急に防除する。

② ほ場の排水を良くし、多湿にならないようにする。

2. モザイク病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀の川市の露地栽培シシトウにおける発生ほ場率は6月4半旬現在、0%（過去8年間の平均5.2%）であった。

② 7月のアブラムシ類の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① アブラムシ類の防除を徹底する。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀北地域の露地栽培ナスでは6月4半旬現在、モモアカアブラムシの寄生葉率11%（平年5.8%）、ワタアブラムシ22%（平年4.7%）と平年に比べやや多かった。

② 紀中地域の露地栽培スイカでは6月4半旬現在、ワタアブラムシの発生は1葉あたり0.3頭（平年0.6頭）と平年並であった。

③ 黄色水盤（紀の川市）への6月の飛来数は4半旬現在、80頭（平年192頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ワタアブラムシ、モモアカアブラムシは、ともに薬剤感受性の低下がみられるので、同一薬剤の連用は避ける。

2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀北地域の施設栽培ナスでは6月4半旬現在、カンザワハダニの発生ほ場率22%（平年25%）、寄生葉率7.2%（平年6.5%）と平年並であった。ナミハダニの発生は認めていない（平年発生ほ場率5.7%、平年寄生葉率0.6%）。

② 紀北地域の露地栽培ナスでは6月4半旬現在、カンザワハダニの発生ほ場率40%（平年45%）、寄生葉率11%（平年15%）と平年並であった。ナミハダニの発生は認めていない（平年発生ほ場率10%、平年寄生葉率3.7%）。

③ 紀中地域の露地栽培スイカでは6月4半旬現在、カンザワハダニは1葉あたり0.6頭（平年0.3頭）、ナミハダニは1葉あたり0.2頭（平年0.1頭）と共に平年並の発生であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性対策として、同一薬剤の連用を避ける。

3. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の施設栽培ナスでは6月4半旬現在、発生ほ場率44%（平成38%）、寄生葉率19%（平成15%）と平成並であった。
- ② 紀北地域の露地栽培ナスでは6月4半旬現在、発生ほ場率0%（平成39%）、寄生葉率0%（平成10%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生が多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。
- ② 施設栽培では、栽培終了後に7～10日間施設を密閉して死滅させ、後作の発生源にならないようにする。

4. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の施設栽培ナスでは6月4半旬現在、発生ほ場率11%（平成23%）、寄生葉率1.1%（平成8.0%）と平成に比べやや少なかった。
- ② 紀北地域の露地栽培ナスでは6月4半旬現在、発生ほ場率10%（平成36%）、寄生葉率2.0%（平成11%）と平成に比べやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ミナミキイロアザミウマの項に準ずる。

5. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀中地域の露地栽培スイカでは6月4半旬現在、被害果率が3.0%（平成4.1%）と平成並であった。
- ② フェロモントラップの6月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市4頭（平成11.4頭）、御坊市92頭（平成95.1頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 若齢幼虫を対象に初期防除に努める。
- ② 幼虫は作物の生長点付近の未展開葉の芯部に潜入するので、薬剤による防除効果が上がりにくい。初期は局部的に発生するので、管理作業時に見つけしだい捕殺する。
- ③ 施設栽培では、栽培終了後に20日程度施設を密閉して死滅させ、後作の発生源にならないようにする。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 6月の累積降水量(6月20日まで)は133ミリ（平成128.5ミリ）と平成並であった。
- ② 県予察ほ場（無防除）における初発は5月31日で平成よりやや早く、6月中旬の発病果率は14.4%（平成37.4%）、発病度は2.3（平成6.5）と、いずれも平成に比べ低かったが、防除区は発病果率3.2%（平成5.5%）、発病

度0.5(平年0.8)と、いずれも平年並であった。

③ 6月中旬の巡回調査によると、発病果率は7.8%(平年4.0%)、果実の発病園率は39%(平年28%)と、いずれも平年に比べ高く、各地域で広く発病がみられた。

④ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 枯枝や剪定枝の処理を徹底する。

② 6月中下旬に薬剤防除のできなかつた園では、7月上旬に散布する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 果実発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場(無防除)における6月中旬の春葉の発病葉率は15.0%(平年17.2%)と平年並であった。

② 6月中旬の巡回調査によると、春葉の発病園率は14%(平年14%)と平年並で、主に日高地域の中晩柑で発病がみられた。

③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発病園では、無機銅水和剤(炭酸カルシウム剤200倍加用)を散布する。強風雨に遭う前の予防散布が重要である。無機銅水和剤は高温時の薬害発生に注意する。

② 春葉、夏梢の病斑は果実への伝染源になるので剪除する。

③ 防風ネット設置などの防風対策に努める。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場(無防除)における6月中旬の100葉あたり雌成虫数は4.4頭(平年6.4頭)と平年並であった。

② 6月中旬の巡回調査によると、発生園率は38%(平年50%)と平年に比べやや少なく、100葉あたり雌成虫数は56頭(平年68頭)、寄生葉率は13.4%(平年15.5%)と平年並であったが、有田地域の一部で多発した園がみられた。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ミカンハダニは高度の薬剤抵抗性系統が出現しやすいので、薬剤抵抗性対策としてマシン油乳剤の散布を励行する。ただし、高温強日射時の散布は薬害が発生しやすく、7月中旬以降の散布は光合成作用を低下させるおそれがあるので、散布は7月上旬までとする。

4. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 やや多

発生時期 第2世代1令幼虫初発日 7月6半旬

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場(無防除)における第1世代1令幼虫の初発は5月4半旬と平年並であった。

② 昨年10月の巡回調査では、発生園率は11.9%(平年7.5%)、寄生果率は0.7%(平年0.5%)と平年よりやや高く雌成虫の越冬量も平年に比べやや多いと考えられる。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 6月下旬に防除できなかつた園では、7月上旬のうちに97%・98%マシン油乳剤の200倍やスプラサイド乳剤40の1,500~2,000倍で防除する。

- ② 未成熟成虫がみられる場合はスプラサイド乳剤40を1,500倍で散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除）における6月中旬のトラップへの誘殺数は平年並で果実寄生は確認していない。

② 巡回調査によると、各地域とも6月の発生量は少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 地域での発生活長調査の結果により、適期防除に努める。

6. ゴマダラカミキリ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場、各地域とも成虫の初発の発生時期および6月中旬の発生量は平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生園では成虫の捕殺に努めるとともに、スプラサイド乳剤40の1,000倍～2,000倍を散布する。さらに発生の多い園では7月中旬以降にモスピラン水溶剤200倍～400倍による株元散布を行う。

<カ キ>

1. 炭そ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月の巡回調査では新梢の病斑は認められなかった。

② 気象庁の予報によると、7月の降水量は平年並である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 適切な肥培管理と園内の通風・日照の改善、発病枝の剪除などの耕種的防除を行う。

② 薬剤は発育枝にも十分散布する。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月の巡回調査では、発病葉率は「富有」で1.2%（平年4.7%）と平年並、「平核無」・「刀根早生」で0%（平年0.7%）と平年並であった。

② 気象庁の予報によると、7月の降水量は平年並である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏にていねいに散布する。

② 盛夏期には一時休止するが、好適な気象条件や園地条件によっては発病を繰り返すので、二次伝染の防止に努める。

3. 円星落葉病、角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 前年秋期の発生から、越冬密度は角斑落葉病、円星落葉病ともに平年並と考えられる。

② 気象庁の予報によると、7月の降水量は平年並である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹勢の低下が発病を助長するので、肥培管理に努める。

- ② 円星落葉病の子のう胞子飛散は、7月中旬までの降雨後に多くみられるので、この時期に薬剤を定期的に予防散布する。

4. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 6月の巡回調査では、寄生果率は「富有」で2.8%（平年9.2%）、「平核無」・「刀根早生」で0.4%（平年1.4%）と平年よりやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 本年のフジコナカイガラムシの発育の早晩は平年並と予想されるので、次回の防除適期は8月上・中旬になると予想される。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月の巡回調査では、発病葉率2.1%（平年5.3%）、「清水白桃」の発病果率は4.0%（平年4.6%）と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 防風ネット、防風垣などの耕種的防除を励行する。

<果樹全般>

1. カメモシ類

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① チャバネアオカメモシ成虫の1か所あたりの越冬虫数は、紀北地域では0.2頭（平年0.2頭）と平年並であった。紀南地域（有田以南）では0.9頭（平年0.3頭）と平年に比べやや多かった。

- ② 紀南地域における越冬箇所率は39%（平年22%）と、やや多かった。

- ③ 果樹園への飛来および予察灯への誘殺数は、紀南地域では5月上旬以降、紀北地域では6月上旬以降よりやや多くみられる。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹園への飛来と被害に注意し、被害のみられる場合には、薬剤散布を速やかに行う。

- ② 県南部におけるウメ・スモモなどの果実被害（主に山間部周辺）に注意が必要である。

- ② 平成22年度発生予察注意報第2号および県農林水産総合技術センターのホームページの果樹カメモシ情報を参照する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境保全室ホームページ <農作物病虫害防除所コーナー>

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。